

切を入る加藤近助と云力量ある男鎧炮の臺と脱し筒よ  
 して是也加藤近助と云力量ある男鎧炮の臺と脱し筒よ  
 てらち起しとねのけ夫よ内よ入て門の扉と押開く行  
 長士率よ下知とて後懸とてうらび列と乱るうらび  
 酒家よ入るづらび濫るよ貪る支分れ堅く制して衆  
 と整一静やわかつて入るら行長京城の跡と見よみそ  
 や悉く逃げ去りて更一人もなく殿内よ入り見れども  
 監司守禦の臣一人もなけれバ宮門空く開れあわ其よ  
 了行長ハ宮城の外に在りて兵士と解て四門を守りて法  
 度嚴重よ云ひ達し後陣の味方と待居たり扱又加藤清  
 正ハ大河と越し玉城一押行くる小本村又藏と云る者

馬よ秣飼ふと見廻りて山よ登り見よ向いよ都城と  
 おがく官家民屋数万軒見よ高き処ハ宮城とありて  
 て炎上る煙を少りて立のりれは是都城は紛れなりと思  
 ひしは急ぎ立退りて清心の前よ罷出てこの處京城と  
 と見よ候違う東北の山れ端に朱の丸是小西梧桐是  
 對馬等の旗多く見え紛れなく味方の勢りや近づきた  
 る覚え候とて都城の一番乗然とて云ふ清心も  
 味方思ひの外途中より隙入り人よ先と越さる事とて  
 安らねさるハ休息もそとて打立とて例の騷  
 月毛よ跨り乗出近路と案内さや悪處とも嫌ら採り

揉て駈られり程は瞬刻の間小都城に馳せつゝ  
 諸將追々馳来り民屋を放火して喚び叫むて乱入り  
 城一番乗ハ清正かきと獨り笑して寄せり  
 行長昨日一説今五城と乗取つて小西が勢宮城と守護  
 四門を堅めて諸卒の到着を待居たり清正の先卒の勢進  
 み来て門を明けよと叫ぶる小西も是ハ小西根津守昨  
 日五城一番乗と仕りて卒の者ども大門を堅め罷在るなり  
 用事ありハ五三人入るアと云士卒ども立歸つて其旨  
 申ししを清正案に相違しつゝ斯て行長清正ハ都に還  
 留りて後陣の味方を待つ處に總大将備前中納言秀家豊

後侍後大友義統黒田甲斐守長政福島左衛門大夫正則小  
 早川左衛門督隆景長曾我部土佐守元親蜂須賀河波守家  
 改毛利右馬頭輝元久留米侍後秀包立花左近将監宗茂其  
 外數員参著あり秀家の陣營に諸将参會ありける先卒の  
 軍監早川主馬首毛利豊後守垣見和泉守竹中原助熊谷内  
 藏助等も参會せり先平安道つて小西行長宗義智黄海道  
 つて黒田長政大友義統全羅道つて小早川隆景久留米侍  
 後秀包立花宗茂筑紫上野分威鏡道つて加藤清正鍋島直  
 茂江原道つて毛利壹岐守慶尚道つて毛利輝元忠清道つ  
 て蜂須賀家政京畿道つて長曾我部元親都城の鎮護ハ字

喜田秀家と定まらう其外金山浦より都を其間の滅く  
よも勢を分ちて相守らせ互に味方と接ぐりめらる

朝鮮初日本勢ハ東萊より三路より分ちて進む一路ハ梁山

密陽清道大丘仁同善山下より尚州に至り李鎰の軍と戦ひ

一路ハ左道の長鬚機張より左兵營蔚山慶州永川新寧義

興軍威化安を陥り龍宮河豊津を渡り関慶より出て中路

の兵と一季より鳥嶺を踰り忠州に入り忠州より西路

より分ち一季ハ驪州より江を渡り楊根より龍津を渡

り京城の東より出づ一季ハ竹山龍仁より漢江の南より

至る又一路ハ金海より星州茂溪縣より江を渡り知

禮金山を登り忠清道の永同より出進り清州を陥り何れ

も同く京畿より向ひしハ旌旗劍戟千里相連り砲聲響き

わたり過り所或ハ十里又ハ五六十里皆險阻より據り營柵

と設け番兵を置いて守り夜ハ火を奉り相應り都元帥金元

ハ濟川亭より在り日本勢の至る望み見て敢て戦ふに悉

く軍器火砲器械を江中より沈め衣服を變り逃げ奔る後支

官沈友正固く止むれども後より李陽元守城の大ハ城中

より在り漢江の軍兵已に散らたりと聞き城の守るべから

ざりと知り是も六城を出り揚州を去り江原道の助

防將元豪初より數百の軍兵を率り驪州の北岸を守り

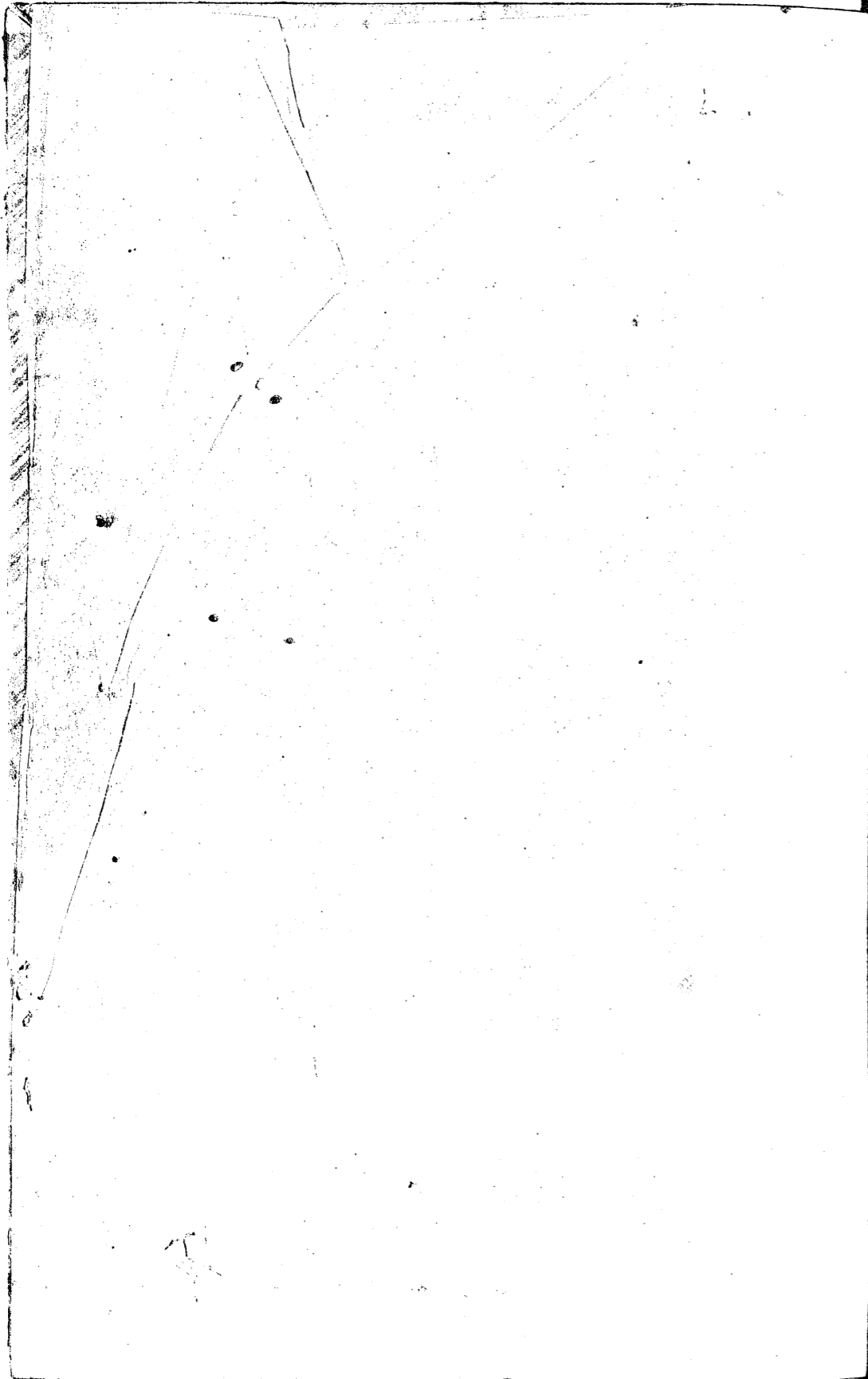
敵軍を支了るハ敵も數日渡る事能はざりし既  
 て江原道の巡察使柳永吉檄文を馳て元豪と奉道江一呼  
 返しぬ日本勢ハ回里の民屋及び官舎と毀ち屋柱と取  
 聯下長筏と組以て渡る中流より水は漂いて死する者  
 も多しけしども元豪既去りて江のほとりには獨りも  
 守る者無し故日と累ねて畢く渡る是は於て三路の日  
 本勢京城を攻め入るぬ城中の民も已に散れ去て一人も  
 居る者なし金命元ハ漢江の守を失ひ行在一向と  
 せりの臨津に至る夏の由と註進しけしハ命あらず更  
 京畿黃海道の兵を徵て臨津を守らめ且申詰りし命

て同く守りて以て日本勢の西に對し路を過りし是日  
 五月國王ハ開城と發し金郊驛に泊る四日義金岩平山府  
 と過り宝山驛に泊り五日安城龍泉級水驛を過り鳳山郡  
 小泊り六日進で黃州に泊り七日は中和を過り平壤に入  
 り給ふ  
 初全羅道の巡察使李洸ハ本道全羅の兵を率ゐる都の援兵  
 と登りしころ小國王西狩し京城已に陥ると聞之るは空  
 く兵を収て全州に還りし道内全羅の人李洸の戦ふ  
 て敗るるを怨め憤りて平壤に者多しをけしハ李洸も  
 安らび思ひ更に兵を調一忠清道の巡察使尹國馨軍

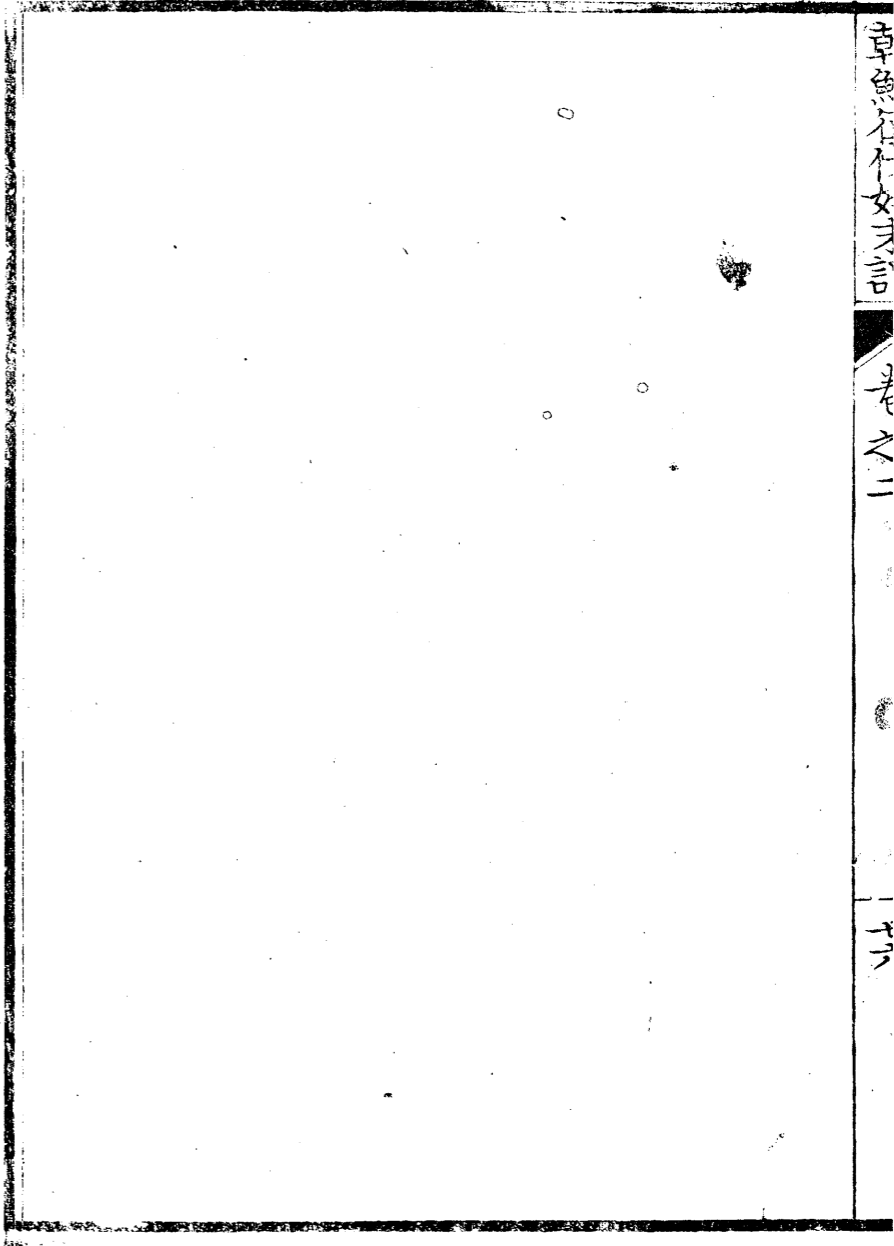
と合せて進む慶尚道の巡察使金碑も其道慶尚軍官  
 數十人と率めて來會し其兵總て五萬餘人龍仁に到り  
 北斗門の山上と望み見る敵の小壘有る李洗心これ  
 を易と見先づ勇士白光彦李時礼等を遣して敵を嘗  
 む光彦等先年の兵と率めて山に登り敵の壘と去る事十  
 餘歩まで馬を下り矢と射つけしやも敵出合ひ其  
 日の晩に敵光彦等の稍懈したるを見て白又と振つて大  
 叫び突出ひ光彦等あつてふるめ馬と索めて赴き  
 と敵ひしる及ぶびて皆敵の爲に害せしる諸軍これ  
 と聞き震ひ懼る此三巡使ハ皆文人として兵務を閑しひ多

然と雖も軍令も調ふべ且險を據て備を設け真古  
 人の所謂軍行如春遊安得不敗と云ふ者古の聖日果して  
 敵軍は朝鮮勢の心臆せしと知り數人双と揮ひ勇猛  
 おて掛りしに三道の軍兵共これと望み見て大に潰  
 乱る其聲山の崩る如く軍資器械を委棄る其數知らべ  
 路を塞ぎて行能なきは日本勢悉く聚めて此  
 事と燒棄けり李洗ハ金羅に還り尹國馨ハ公州に去り金  
 暉ハ慶尚右道に還りける

朝鮮征討始末記卷之二終



210.4  
3



草繪本

卷之二

十一

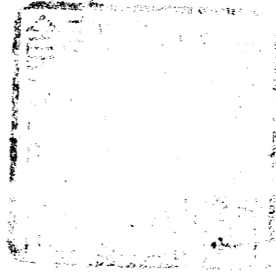
正  
實 朝鮮征討始末記

三

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

210.4
4
5





朝鮮征討始末記卷之三

對州

山崎尚長 輯  
村一善 校

小西加藤黑田臨津合戰之事

日本小西行長加藤清正黑田長政等京城を進發して臨津の南に陣を取り朝鮮の軍勢江中は大船を數艘繋ぎ浮り北岸に陣を取り江灘を守り但江を隔て鉄炮を放ち矢軍のゆるぎを數日渡り事を得ざる小西加藤黑田謀と巡り俄に陣屋に火を掛け引取りけり朝鮮の軍勢も和軍の敗るると討つめむ急に進む追懸たす加藤小

朝鮮征討始末記



西の軍勢とも崩れ立ち我先きよと逃げ走る敵山の後れ  
 切所に入らる時急て設け置きたる伏兵一度は咄と突  
 て出る朝鮮勢此處より大崩れたる敗走し寄手氣は棄て  
 て短兵急は追懸けれを敗軍の朝鮮勢江の岸に至ると云  
 つも渡るを得ひ岬の上より水中に飛入ると溺死せ  
 る逃げおくれたる者共ハ寄手頻る追懸くるも一人も  
 又向ふ者なく立足もなく敗走する追詰る撫切する  
 討ち捨ける向ひの岬は居たる朝鮮勢是と見て逃来味方  
 と救くむもせば一同は逃走し和軍大に討勝て臨津  
 を渡り黄海道の安城駅に著陣し多う人馬の足と休め

其より黒田長政ハ黄海道に赴き小西行長ハ平安道加藤  
 清正は咸鏡道に赴きける

朝鮮 副元帥申格ハ初め金命元都元に從て副將たりしが

漢江の崩れも金命元後より李陽元守城大將に從ひ

て楊州に居たりし時咸鏡道の兵使南兵馬節度使李渾が兵

至る申格ハ李渾と兵を合せ日本勢の京城より出て布町

をとり散掠する邀一撃破りけり京城守護の日本將浮田秀家朝鮮の

勢の楊州に在る者と討散すむと打出る申格は出合

ひ戦ひ及びり浮田勢崩れ立て敗北し追首六十余級

朝鮮勢の討取られり日本勢の朝鮮に入ると始て

の捷軍ゆゑ人皆踊り上り悦び々々然るも金命元臨津に

在りて申恪擅しんかくせんに他處たじこ不適ふたふて都元帥みやまのすけの号令こうれいに從したがふる由よしを注進ちゆうしんして右相みぎさへ右議みぎぎ俞泓遠ゆうかうえんよこせを誅あやせしと清きよい宣傳しんぷを差下さげせし此捷軍このしやくぐんの注進ちゆうしん至いたりては跡あとより追おふとらうて止めけせども及および終はつに軍中ぐんちゆうより斬ころれり此申恪このしんかくハ武人ぶじんありて素清慎すけいしんなり嘗あまて延安えんあの府使ふりしたりて時城ときじを修おめ壕ぼを深く軍器ぐんぎを多く備おけ置おけ後のちに李廷りてい諶しん延安えんあを守まもりて城じやうを全く持堪もちかへたり皆人みなひと以為をこれ申恪このしんかくが功こうありと云いつて此方このあたの死し其罪そのつみよ非あらざる上うへに九十歳こじゅうしゅうさい及およびたる老母らうぼ有ありてこれこれを聞きく者ものあらと痛いたみ哀あはれぬハ無ならうけり

知事ちし韓應寅かんおういん平安道へいあんどう江邊えんべんの精兵せいへい三千人さんせんにんと帥すいの臨津りんしんよ赴おもむて日本にっぽん勢せいと撃うちよ尤なほも金命元きんめいげんの節制せつせいと受うくる事こと勿なしとたる也なり金命元きんめいげんハ副元帥ふくげんすい申恪しんかくの号令ごうれいに從したがふ也なり左相ささへ尹斗壽いんとしゆう諸人しよじん小向せうかうして斯人このひとの状貌じやうぼう福相ふくさうありて必かな能らく事ことを弁わせしと云いて應寅おういん遂つひに小命せうめいと受うけて臨津りんしんよ向むかひけし初はつめ金命元きんめいげんハ臨津りんしんの北きたに在ありて諸軍しよぐんと分わかりて江灘えんたんを守まもりて江中えんちゆうの船ふねを斂あめり悉しつく北岸きたがしよ置おきたりてゆゑ日本にっぽん勢せいも陣屋ぢんやと臨津りんしんの南みなみに結むすび船ふねの渡わたるべき無なれど但ただ遊兵ゆうへいを出だし江えと隔へて交戦かうせんせり事こと十餘日じゆじゆにちなるも敵てき終はつに渡事わた能らざりし一日いちにち日本にっぽん勢せい江えの上うへの陣屋ぢんやと焚やき拂はい帷幕ゐまと撤はき軍器ぐんぎと取片とり付けけ退ひく